内海中寺ノ谷遺跡

県営内海中地区ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（第２冊）

２００５．３

鳥取市教育委員会

序　　文

鳥取市は海・山・大砂丘など豊かな自然環境に恵まれた山陰東部の中核都市として発展してまいりましたが、平成16年11月の周辺町村との合併で人口20万人余りを有する山陰有数の都市としてさらに羽ばたこうとしております。

現在市内には数多くの遺跡が知られておりますが、各種開発事業に伴うその取り扱いはますます重要課題となっております。もともと埋蔵文化財は、先人の生活を知る上で欠くべからざるものと言われてまいりましたが、地方重視、地方発信が叫ばれる今日、地域の先人たちの知恵・交流を窺い知ることは、これからの生活・交流等にかならずや役立つ市民の貴重な財産となりましょう。このような認識のもと鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく関係各機関との協議を重ね、また市民の皆様の深いご理解をいただきながら文化財保護行政を進めております。

さてここに報告いたします内海中寺ノ谷遺跡の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって無事初期の目的を果たし、ここに報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様ならびに関係の皆様のご利用に供していただければ幸いです。

平成17年３月

鳥取市教育委員会
教育長　中川俊隆

本文目次

はじめに …… 1
1．発掘調査に至る経緯と経過 …… 1
2．遺跡の位置と環境 …… 3
3．発掘調査の概要 …… 4
おわりに …… 11
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図　内海中寺ノ谷遺跡　調査地周辺遺跡分布図 …… 1
第2図　内海中寺ノ谷遺跡　調査地位置図 …… 2
第3図　内海中1号墳（仮）周辺出土遺物実測図 …… 3
第4図　内海中寺ノ谷遺跡　調査遺構配置図 …… 5、6
第5図　内海中寺ノ谷遺跡　調査土坑実測図 …… 7
第6図　内海中寺ノ谷遺跡　調査溝状遺構実測図 …… 9、10
第7図　内海中寺ノ谷遺跡　調査ピット状遺構実測図 …… 11
第8図　内海中寺ノ谷遺跡　調査地内出土遺物実測図 …… 12

図版目次

ＰＬ．1　1．内海中寺ノ谷遺跡 調査地遠景（東から）
2．内海中寺ノ谷遺跡 調査前全景（南西から）
3．内海中寺ノ谷遺跡 調査後全景（南西から）
4．内海中寺ノ谷遺跡 中央横断ベルト断面（北東から）
ＰＬ．2　1．内海中寺ノ谷遺跡 SK-01断面（南東から）
2．内海中寺ノ谷遺跡 SK-01完掘状況（北東から）
3．内海中寺ノ谷遺跡 SK-02断面（北東から）
4．内海中寺ノ谷遺跡 SK-02完掘状況（南西から）
5．内海中寺ノ谷遺跡 SK-03断面（北から）
6．内海中寺ノ谷遺跡 SD-04、03完掘状況（南西から）
7．内海中寺ノ谷遺跡 SD-02完掘状況（南西から）
ＰＬ．3　1．内海中寺ノ谷遺跡 SD-05完掘状況（北東から）
2．内海中寺ノ谷遺跡 SD-06、07、08完掘状況（北から）
3．内海中寺ノ谷遺跡 SD-11、09完掘状況（東から）
4．内海中寺ノ谷遺跡 ピット群完掘状況（北西から）
5．内海中寺ノ谷遺跡 P-01断面（南東から）
6．内海中寺ノ谷遺跡 P-02断面（南東から）
ＰＬ．4　1．内海中寺ノ谷遺跡 P-04断面（南東から）
2．内海中寺ノ谷遺跡 P-11断面（北西から）
3．内海中寺ノ谷遺跡 P-14断面（南西から）
4．内海中寺ノ谷遺跡 P-15断面（北西から）
5．内海中寺ノ谷遺跡 P-27断面（北東から）
6．内海中寺ノ谷遺跡 P-29断面（北東から）
7．内海中寺ノ谷遺跡 P-28出土遺物
ＰＬ．5　1．内海中寺ノ谷遺跡 遺構外出土遺物
2．内海中1号墳(仮) 発見状況（西から）
3．内海中1号墳(仮) 周辺出土遺物

例　言

1．本書は、県営内海中ほ場整備事業の事前調査として行った発掘調査のうち平成16年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財の記録である。
2．調査を実施した遺跡は内海中寺ノ谷遺跡である。
3．本書に用いた方位は磁北を示し、レベル（H）は海抜標高である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5．現地調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。厚く感謝いたします。
6．発掘調査の体制は以下のとおりである。

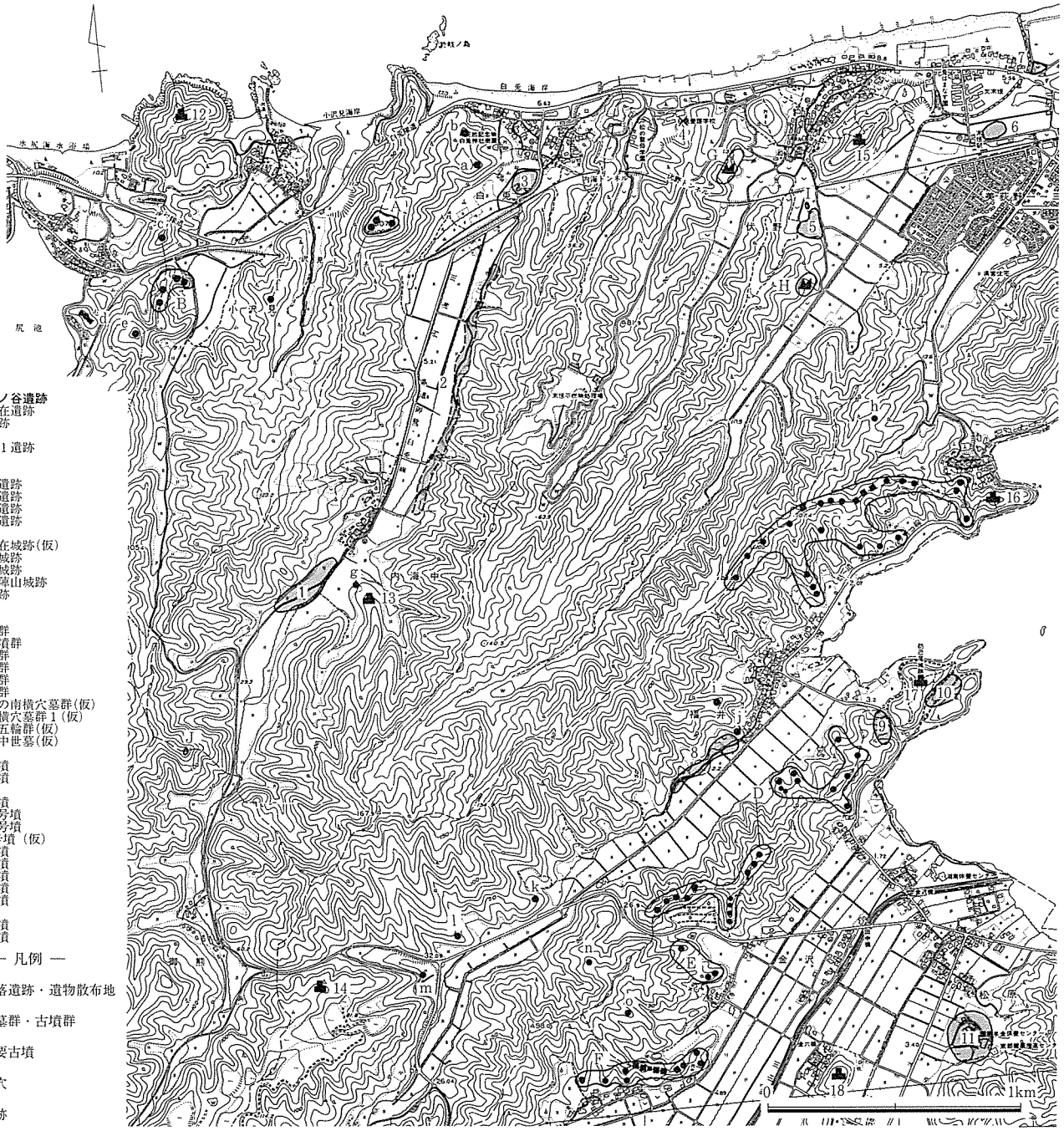
発掘調査主体　　鳥取市教育委員会
事務局　　鳥取市教育委員会 庶務課文化財室（～平成16年10月）、文化財課（同年11月～）
調査担当者　　前田　均・谷口恭子・平川　誠

《はじめに》

鳥取市は鳥取県東部に位置する山陰の中核都市で、県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担ってきたが、このたび平成16（2004）年11月１日をもって周辺８町村との合併がなされ、人口は20万２千人余りと念願の20万都市が実現し、面積も中国地方有数の765.66㎢へと広がることとなった。このような新生鳥取市の中で内海中寺ノ谷遺跡の所在する内海中地区は、池としては国内最大の湖山池の西、合併前の旧鳥取市と気高町の境界近くに位置する。周辺は西側・東側とも南北に延びる丘陵に挟まれた幅150～300m程度の谷平野で、白兎神話で有名な鳥取市白兎（旧内海村）の南約1.5km、西側丘陵裾付近に形成された世帯数20余りの地区である。

１．発掘調査に至る経緯と経過

今回報告する内海中寺ノ谷遺跡は、上述内海中集落の南南西100m強、標高約13mの谷平野の西側丘陵裾に位置する。近年まで周辺ではこの谷平野の口部分で砂丘下から多量の五輪塔や土器類が出土した



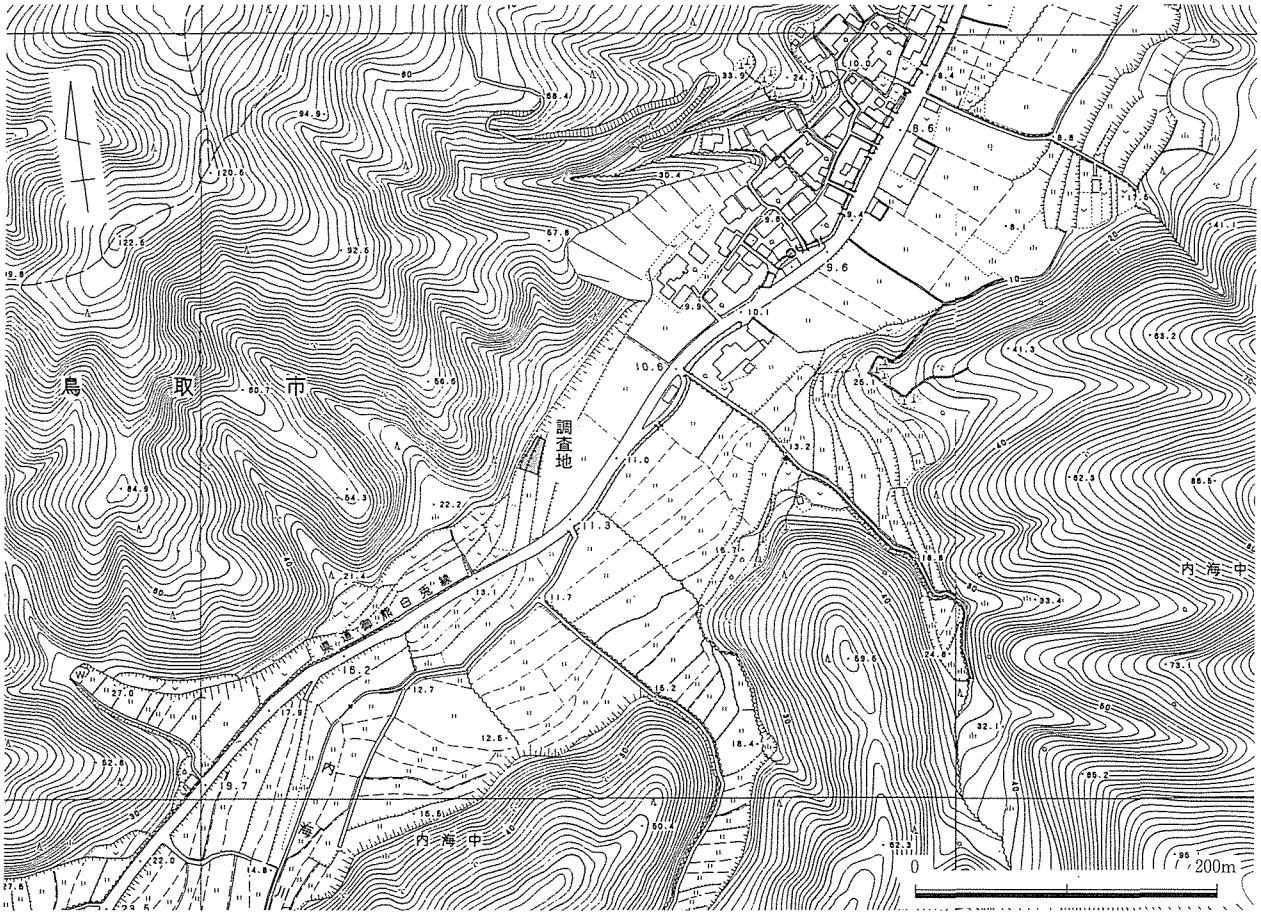
第１図　内海中寺ノ谷遺跡　調査地周辺遺跡分布図

「身干山遺跡」が知られる以外はほとんど遺跡は知られていなかったが、平成８年の鳥取県の詳細遺跡分布調査でこの谷平野の東側丘陵裾の小谷口から須恵器片が確認され、「白兎須恵器出土地（仮）」が登録された。その後、この谷平野のほぼ全域にわたるほ場整備が計画されたため、鳥取市教育委員会による周辺の試掘調査が遺跡・遺構・遺物の有無、その範囲・性格等を知る目的で平成14年度に実施された。その結果、密度の違いはあるものの、内海中集落の北東側丘陵裾周辺と同集落の南南西側丘陵裾付近に比較的密度の高い遺物の散布あるいは遺構が存在することが判明した。しかしながら遺跡の具体的な性格や範囲を確定できなかったことから暫定的に内海中所在遺跡（仮）として周知されるに至っている。

今回の発掘調査は、この県営内海中地区ほ場整備計画にともなって鳥取市教育委員会と関係機関との間で計画変更等も含めた種々の協議がなされた結果、現状での遺跡の保護・保存が難しい内海中寺ノ谷地区について記録保存の調査を行うこととなったものである。調査を実施するにあたっては、対象地を分断する県道等によって調査地をＡ区、Ｂ区、Ｃ区と工区分けし、このうちＡ、Ｂ区の調査を財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、Ｃ区の調査を鳥取市教育委員会が実施することとなった。

Ｃ区の現地調査は、平成16年８月初に着手した。調査に当たっては隣接するＢ区との整合性を確保するため、Ｂ区の基準ライン端部から地形にあわせて東へ10度の角度を振ったライン上に基準となる測量杭を設定し、さらにこれに直交する測量杭を適宜設定した。

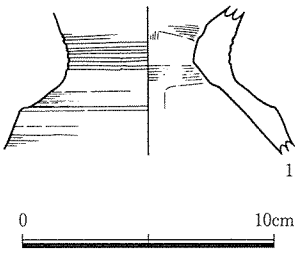
調査の結果、土坑、溝状遺構、ピット状遺構を検出し、各種記録類の作成を行いながら10月中旬に現地調査を終了した。調査面積は207㎡である。なお、これまで内海中地区周辺の遺跡は上述のとおり内海中所在遺跡（仮）として大きく括られていた。しかしながら今回の調査地周辺では、谷平野中央を流れる内海川に向かって下るにしたがってしだいにその遺構密度が稀薄になることが判明した。このため、他の遺構・遺物の集中する地区とはやや離れ、しかもそれらとは位置的に対岸にあたり、さらに遺跡の



第２図　内海中寺ノ谷遺跡　調査地位置図

時期や性格もある程度限定するものと見られることなどから調査地周辺をその小字名から内海中寺ノ谷遺跡として内海中所在遺跡（仮）から分けることとした。

また調査中に、ほ場整備関連造成工事中の東側丘陵裾から石室の一部が新規発見された。これ以上の現状変更がないことから周辺の現状確認を行い「内海中１号墳（仮）」として新規登録した。その際古墳周辺から土師器片が採取され、器台片（１）を図化した。さらにそのすぐ上の丘陵先端には複数の竪堀や堀切をめぐらせた城跡が存在することも確認した（「内海中所在城跡（仮）」）。



第３図　内海中１号墳（仮）周辺出土遺物実測図

２．遺跡の位置と環境

内海中寺ノ谷遺跡は鳥取平野の西に位置する湖山池（潟湖）の西約２㎞の鳥取市内海中に所在する。ＪＲ鳥取駅からは直線距離で北北西へ約11㎞、鳥取空港からは国道９号線を西へ約４㎞の白兎海岸を経由して、ＪＲ山陰本線をくぐりながら県道御熊白兎線を南へ約２㎞に位置する。周辺は前述のとおり東西とも南北に延びて北の日本海に突出する丘陵に挟まれた狭量な谷平野（沖積平野）で、北側を砂丘地に塞がれた地形となっている。この谷平野は現在中を流れる内海川の水利を利用した水田耕作等が主に行われているが、「因幡志」によると、かつてはこの一帯は流水を湛えた湖であったが、領主であった亀井茲矩が岩石を切り開いて水を抜き水田としたとされる。

周辺の遺跡について見ると、最近の分布調査・試掘調査で明らかになった内海中所在遺跡（仮）をあげることができる。当初は前述のとおり本遺跡もその範囲内とされていたが、白兎（旧内海）地区と内海中地区のちょうど中間付近の東側丘陵裾から羽状縄文の地文に連続爪形文が施された縄文時代前期の土器片が採取されており、旧市内ではまだ類例の少ないものとして貴重である。また同時に後期の土器や弥生土器、須恵器、土師器等も見つかっている。県内では近年旧潟湖地形とされる小平野の外縁部から貴重な遺跡が見つかっており、この谷平野周辺も今後も注目していく必要があろう。またこの谷平野の北側に形成された砂丘の下からはかつての採砂工事中に２層のクロスナ層が確認され、その下位層から弥生土器が、上位層から古墳時代の石棺が、さらに上位クロスナ層のさらに上の砂上から宝篋印塔や五輪塔、中世陶器等が多量に出土したことが確認されており、現在は消滅しているものの身干山遺跡として現地に宝篋印塔や五輪塔といった石造品だけが集めて残されている。この遺跡は、海岸線の侵攻や後退、砂丘の形成とクロスナの形成時期等を考える上でも大変貴重である。さらに今回のほ場整備関連造成工事中に調査地とは内海川を挟んで反対の東側丘陵裾から石室の一部が発見されたことは先にふれたが、これまでこの谷平野周辺では上述の身干山遺跡とその西側丘陵上に５基の古墳が展開する白兎古墳群、調査地の南西１㎞弱の丘陵上の御熊所在中世墓以外では墳墓は知られておらず、当該地区の歴史の大切な資料である。周辺の畑地には１ｍを超すかと思えるやや扁平な石材も見受けられ、周辺踏査ではその他の明確な石材の露出等は認められなかったものの、この他にも古墳等が存在する可能性を考慮する必要がある。またこの古墳の後背部にあたる標高60ｍ弱の丘陵上には三段程度の平坦部をもち、その周囲に６条ほどの竪堀と尾根を横断する堀切をもった城跡（内海中所在城跡（仮））が認められる。文政元年（1818年）の『因伯古城跡図志』に内海中の東の山上に中村城跡があり、あるいはこの城跡がこれに相当する可能性もあるが、当地との深い関わりのあったとされる中村氏との関係も含めて現時点ではその由来は不明である。さらに外に目を向けると、東側の湖山池西岸部には三津、岩本、大谷、大畑、福井の各古墳群や岩本第１・第２遺跡、松原谷田遺跡、防己尾城跡等が形成され、西側の旧気高町東端の丘陵上に小沢見古墳群等が、水尻池東岸の低丘陵上に双方中円墳とされる沢見塚古墳が、日本海に突き出た丘陵上に大崎城跡が知られている。

３．発掘調査の概要

内海中寺ノ谷遺跡は内海中集落の南南西約100ｍの丘陵裾に位置し、遺物の散布状況等から丘陵から前面の谷中央部に向かって舌状に張り出す微高地上に形成されているものと考えられる。今回の調査対象地はほ場整備による削平予定地で、この張出し微高地のほぼ中央から北東部である。また対象地は南からＡ、Ｂ、Ｃ区に分けられ、今回調査を行ったＣ区はそのうちの北東端部にあたる。当該地は標高は丘陵側となる西側から谷側となる東側へ下がる12～13ｍで、両端の比高差は１ｍ程度である。これまでは畑作地として利用されており、耕作の関係か旧地形が削平されているものとみられ、調査地の中央部に南北方向の高さ１ｍ程度の段が走る。

調査地の層序は基本的には丘陵から谷への自然傾斜によるものと考えられるが、厚さ20㎝程度の耕作土（第１、２層）下が遺構検出面で、標高は上段は13ｍ程度、下段は12ｍ程度である。以下は、削平されたとみられる上段を除き、段の法部分から下には10～20㎝程度のにぶい黄褐色粘質土（第７、８）層が、さらにその下には上段・下段とも褐色粘質土（第９）層が堆積する。なお遺物は耕作土と遺構検出面上および遺構内から出土している。

遺構検出面からは、自然傾斜に直交する北北東～南南西方向の数条の暗渠あるいは肥料穴が認められたが、その他に土坑３基、溝状遺構11条、ピット状遺構39基が検出された。以下、各遺構についてふれる。

１）土坑（ＳＫ）［第５図､PL.2］

ＳＫ－０１　調査地上段の南西側、Ｃ１杭の南西2.5ｍに位置する。検出面の標高は12.88ｍで、底部高は12.60ｍである。南東側は暗渠に切られ平面形は不明であるが、多角形状にやや角張る傾向が見受けられる。主軸も不明ながら、現状からはN-40°-E程度が想定され、規模は遺存値で、長さ90.0㎝、検出面からの深さ30.0㎝を測る。断面形はやや不整な椀状で、４層に分けられる埋土の最下層（第３層;暗黄褐色粘質土）には５～15㎝大の角礫が含まれる。遺物は検出されておらず、その性格等詳細は不明である。

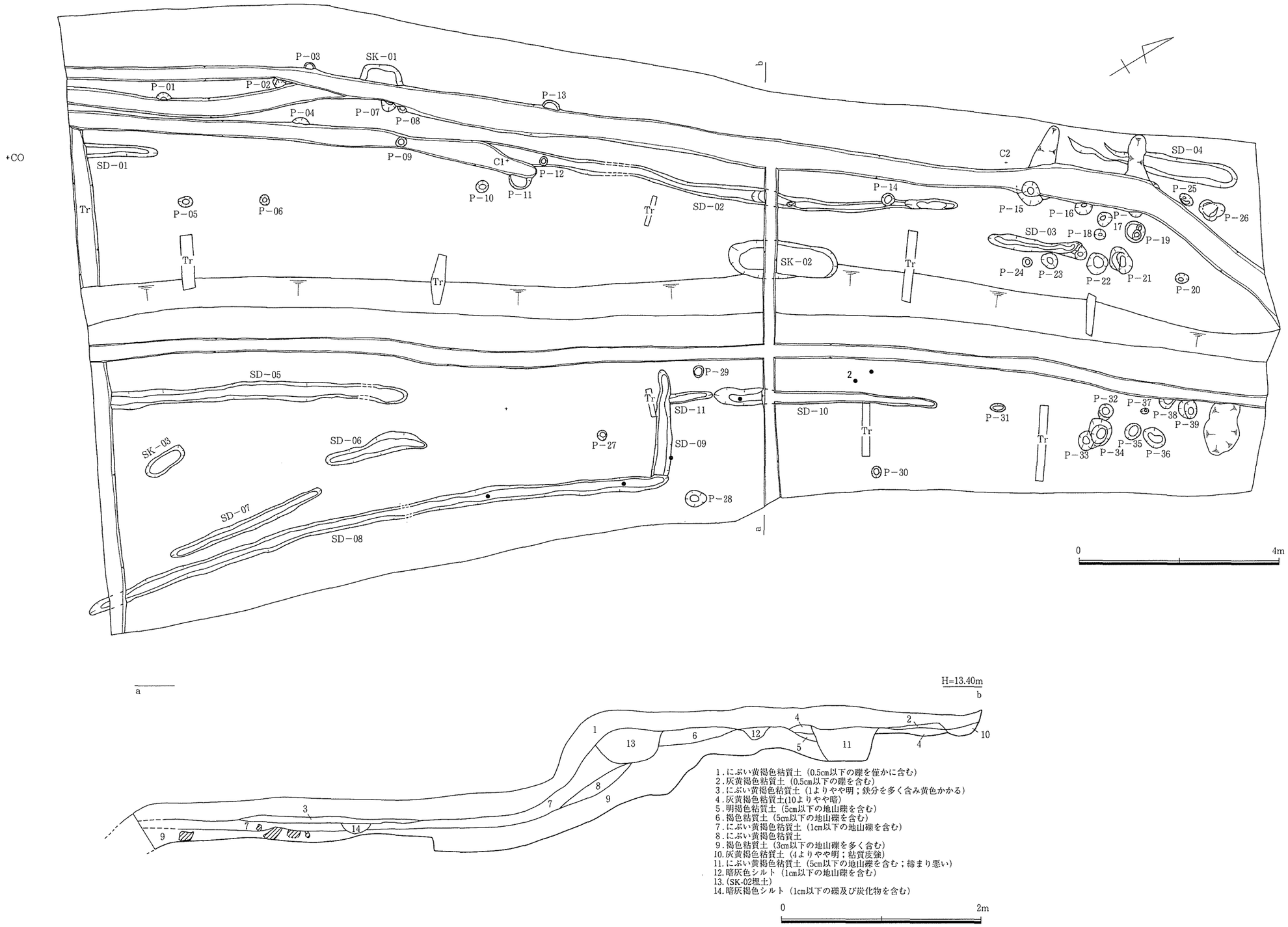
ＳＫ－０２　調査地中央よりやや北側の上段から下段への境界付近、Ｃ２杭の南４ｍに位置する。検出面の標高は12.96ｍで、底部高は12.62ｍである。平面形は長楕円形状を呈し、主軸はN-36°-Eにとる。規模は、長さ218.5㎝、幅78.0㎝を測る。横断面は椀状で、検出面からの深さは32.0㎝を測り、長軸方向では南東側が５㎝程度深くなる。埋土は６層に分かれ、第２（暗褐色シルト）層から土鍋の口縁部片が出土したが細片で図化するには至らなかった。

ＳＫ－０３　調査地下段の南側境界近く、Ｃ１杭の南９ｍに位置する。検出面の標高は11.92ｍで、底部高は11.84ｍである。平面形は長楕円形状を呈し、主軸はN-１°-Wにとる。規模は、長さ87.5㎝、幅35.5㎝を測る。横断面は皿状で、検出面からの深さは10.0㎝を測る。埋土は３層に分けられる。遺物は検出されておらず、その性格等詳細は不明である。

２）溝状遺構（ＳＤ）［第６図､PL.2,3］

ＳＤ－０１　調査地上段の南西境界付近に位置する。耕作土下から検出し、検出面の標高は12.96ｍである。北西側に位置する暗渠とほぼ並行の北東～南西方向に延び、北東端は徐々にその幅を減じるとともに深さも減じて終結するが、南西端は調査区外へ続く。主軸はN-33°-Eにとり、遺存長1.48ｍ、幅は20～30㎝程度、底面標高は12.92ｍで深さは3.9㎝程度である。横断面は浅い皿状となる。埋土は単一層で褐色シルト（黄褐色土ブロックを含む）である。なお遺物は検出されなかった。

ＳＤ－０２　調査地上段の北西側に位置する。耕作土下から検出し、検出面の標高は12.99ｍである。北東～南西方向にわずかに蛇行するように延び、北東端は終結するが南西端は暗渠に切られる形でそれと重なる。また南西側ではP-12と重なり、北東側ではP-14を切る。底面は中央付近および北東端部に５～６㎝程度のくぼみがある。主軸はN-30～41°-E程度にとり、遺存長9.68ｍ、幅は30㎝程度、底面標高

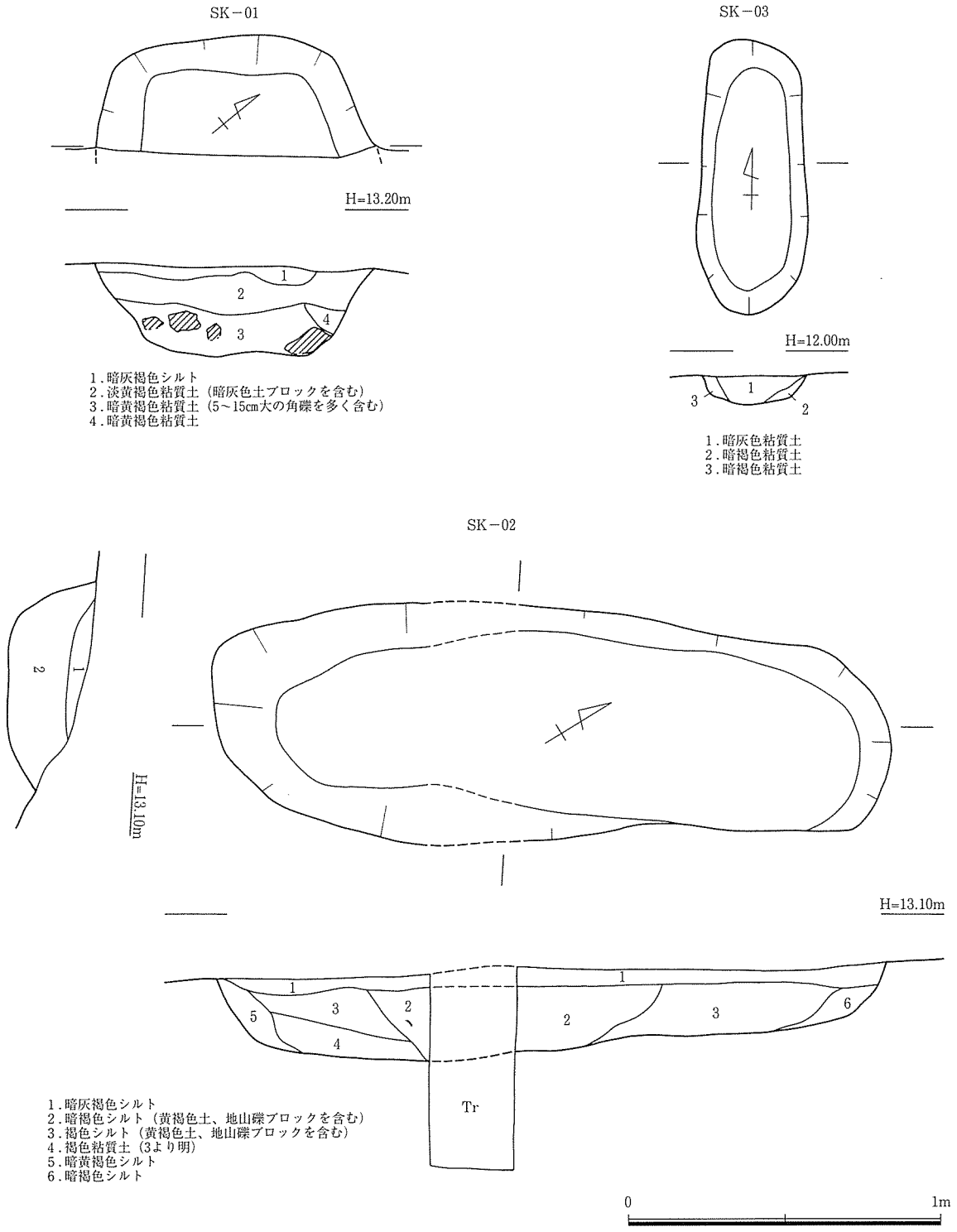


第４図　内海中寺ノ谷遺跡　調査遺構配置図

は12.86mで深さは南西側がやや深く、11～4㎝程度である。横断面は浅い皿状となる。埋土は単一層で暗灰色シルトである。なお遺物は検出されなかった。

ＳＤ－０３　調査地上段の北側に位置し、周辺からはピットが集中して検出されている。検出面の標高は12.96mである。北西側に位置する暗渠とほぼ並行の北東～南西方向に延び、両端とも終結するが、北東端部はピット状にくぼむ。主軸はN-37°-Eにとり、長さ1.83m、最大幅28㎝、底面標高は12.80mで深さは5～13㎝程度である。横断面は逆台形状で、埋土は暗灰褐色シルト（1）と暗褐色粘質土（2）の二層に分けられる。なお遺物は検出されなかった。

ＳＤ－０４　調査地上段の北隅に位置する。耕作土下から検出し、検出面の標高は12.99mである。北



第５図　内海中寺ノ谷遺跡　調査土坑実測図

東～南西方向に延びるが、北東端は終結し南東側は、西へ曲がる傾向をみせながら調査区外へ続く。主軸はN-45°-Eにとり、遺存長3.48m、最大幅48cm程度、底面標高は12.85mで深さは3～9cm程度である。横断面は浅い皿状となる。埋土は単一層で暗灰色シルトである。なお遺物は検出されなかった。

ＳＤ－０５　調査地下段の南西側に位置する。検出面の標高は12.01mである。北西側に位置する暗渠とほぼ並行の北東～南西方向に延び、北東端は終結するが、南西端は調査区外へ続く。主軸はN-26～31.5°-Eにとり、遺存長5.93m、幅は37cm程度、底面標高は11.90mで、深さは中央部がやや深くなるが3～10cm程度である。横断面は浅い皿状となる。埋土は単一層で暗灰色粘質土である。なお遺物は検出されなかった。

ＳＤ－０６　調査地下段の南西側、ＳＤ－05の北東約0.6mに位置する。検出面の標高は11.99mで南北方向のN-16°-Eに主軸をとる。両端とも終結し、長さは2.04m、幅は北半が広く41cmで南は25cm程度である。底面標高は11.90mで、深さは中央部がやや深くなるが3～9cm程度である。横断面は浅い皿状となる。埋土は単一層で暗灰色シルト（黄褐色土ブロックを含む）である。なお遺物は青磁細片1点が検出されている。

ＳＤ－０７　調査地下段の南側、ＳＤ－06の南南東約0.4mに位置する。検出面の標高は11.98mで南北方向のN-6.5°-Eに主軸をとる。両端とも終結し、長さ3.28m、最大幅24cm、底面標高は11.90mで、深さは4cm程度である。横断面は浅い皿状となる。埋土は単一層で暗灰色シルト（黄褐色土ブロックを含む）である。なお遺物は検出されなかった。

ＳＤ－０８　調査地下段の南東側、ＳＤ－07の東約0.2mに位置する。検出面の標高は12.03mで東の谷側にやや湾曲しながら南北方向のN-9～24°-Eに主軸をとる。両端とも終結し北端部はＳＤ－09と接続する。長さ11.88m、最大幅33cm、底面標高は11.71mで、深さは北東側にやや深く17～29cm程度である。横断面はU字状となる。埋土は暗褐色シルト（1）と暗灰色粘質土（2）の二層に分けられ、この境付近から瓦質土器片2点が検出された。

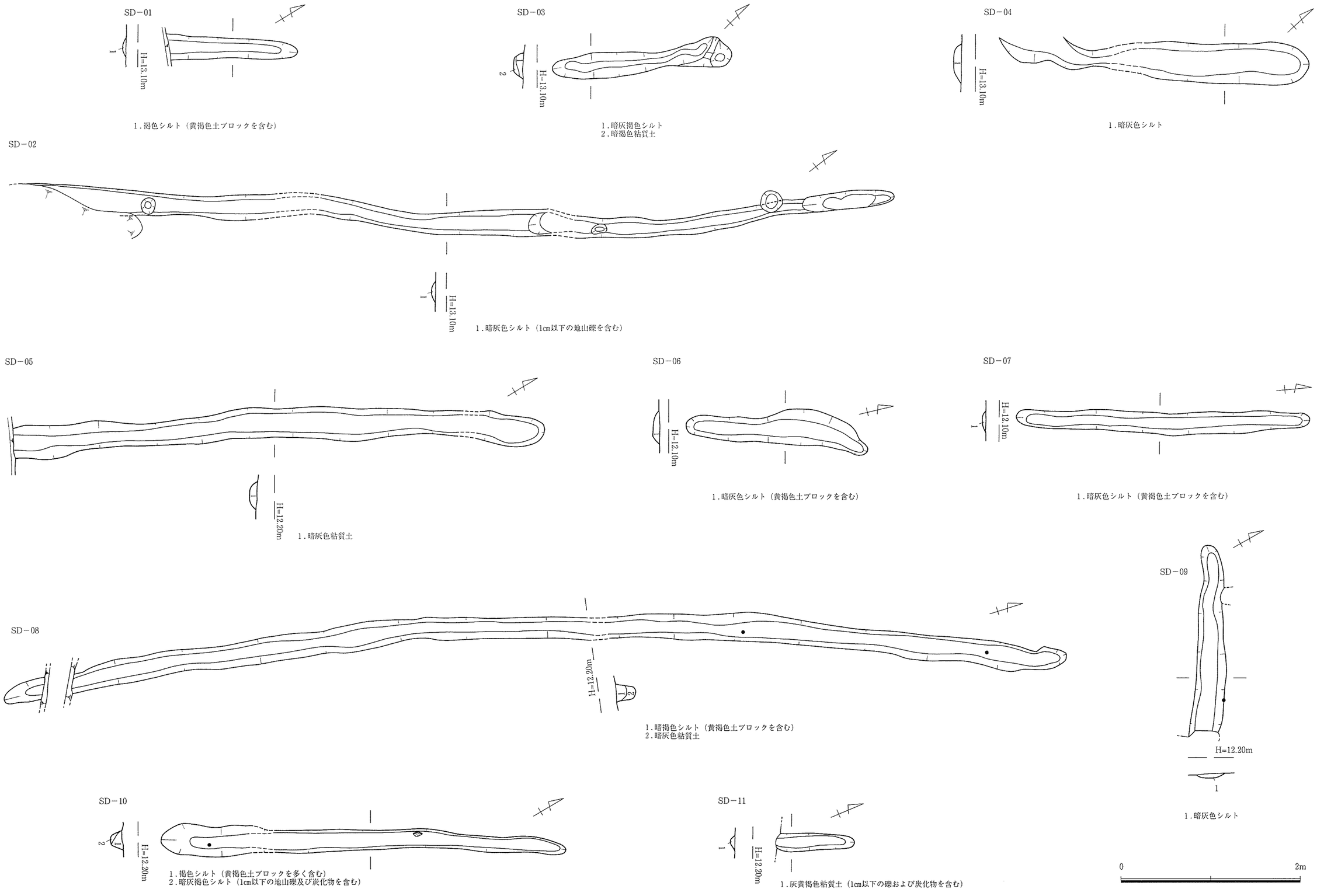
ＳＤ－０９　調査地下段中央部に位置し、ＳＤ－08にその南東端が接続する。検出面の標高は12.05mでＳＤ－08とほぼ直交方向のN-59°-Wに主軸をとる。北西端は終結し、長さ2.16m、最大幅35cm、底面標高は11.95mで、深さは5～8cm程度である。横断面は浅い皿状となる。埋土は単一層で暗灰色シルトである。遺物は陶器および瓦質土器細片がわずかに検出されている。

ＳＤ－１０　調査地下段中央よりやや北に位置する。検出面の標高は12.06mで、主軸は北東～南西方向のN-30°-Eにとる。両端とも終結し、長さ4.51m、幅は南西側がやや広く35cm程度で、北東側は20cm程度である。底面標高は11.90mで、深さは10～13cm程度である。横断面は逆台形状で、埋土は褐色シルト（1）と暗灰褐色シルト（2）の二層に分けられる。遺物は瓦質土器細片がわずかに検出され、すぐ北西の遺構検出面上からは瓦質の土鍋片、土師器片、須恵器片も検出されている。

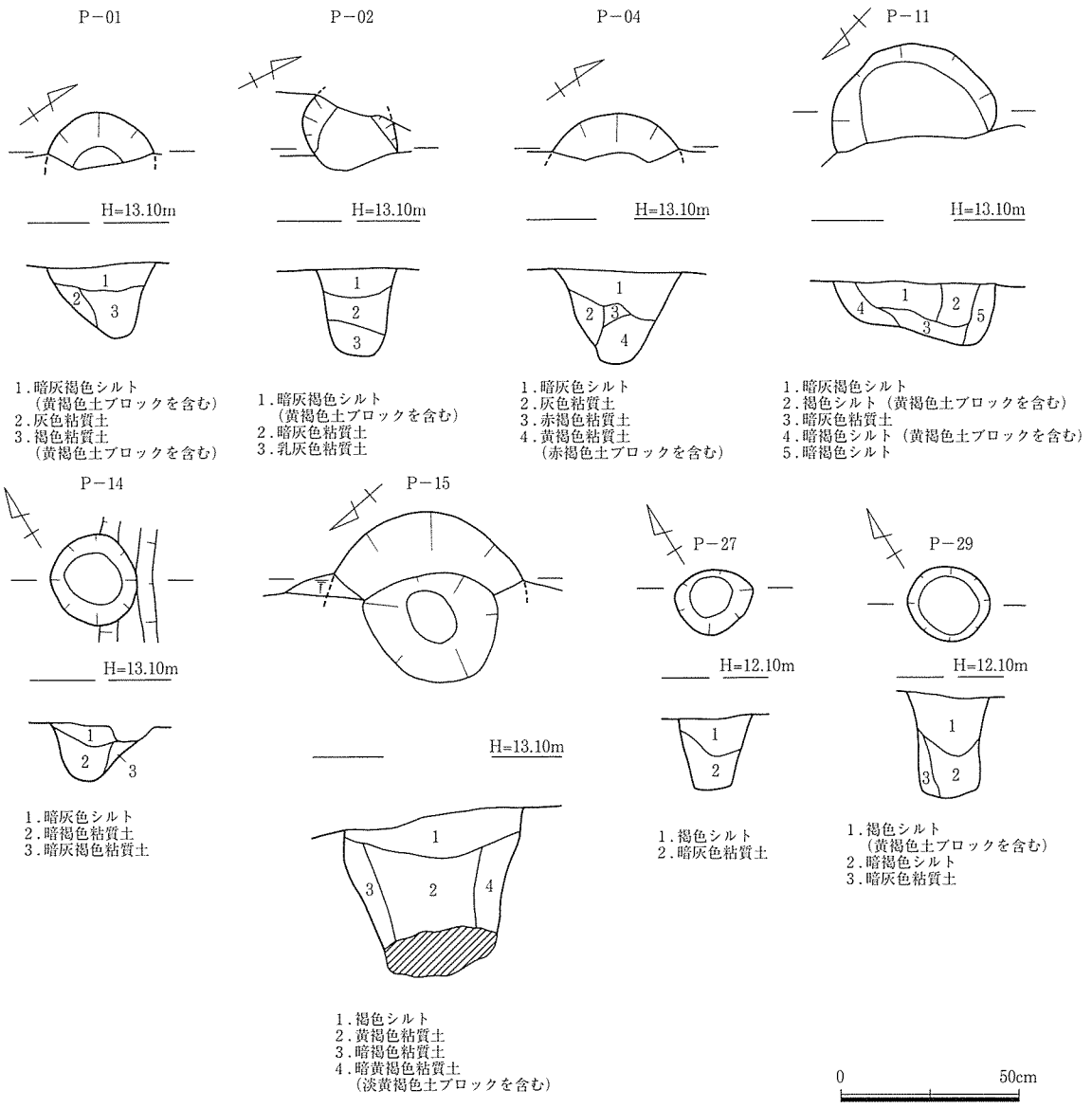
ＳＤ－１１　調査地下段中央部、ＳＤ－10の南西側延長線上にほぼ隣接し、その南西端はＳＤ－09に接続する。検出面の標高は12.05mで、主軸は北東～南西方向のN-18.5°-Eにとる。長さは0.88mで最大幅は21cm、底面2か所に5cm程度のくぼみがあるが、標高は12.01mで北東側に浅くなり、深さはくぼみを除くと南西端で4cm程度である。横断面は皿状で、埋土は灰黄褐色粘質土（1cm以下の礫および炭化物を含む）の単一層である。なお遺物は検出されなかった。

3）ピット状遺構（P）［第7図、PL.3,4］

調査地全体で39基のピット状遺構を検出した。大まかには調査地上段南西側（P-01～14）、調査地下段中央付近（P-27～30）、調査地北東側の上下段（P-15～26、31～39）に比較的まとまりをもつ。このうち前者は、径は20～30cmのものが多く、深さは10～20cm代のものが多い。埋土は暗褐色シルトの単一層が多く、他に灰色系の混じるものあるいは黄褐色系のものも若干認められる。中者の径は42.0cmのP-28以外は20cm代で、深さは14～28cm、暗褐色系の埋土が多い。P-28からは瓦質の土鍋片が検出されてい



第６図　内海中寺ノ谷遺跡　調査溝状遺構実測図



第７図　内海中寺ノ谷遺跡　調査ピット状遺構実測図

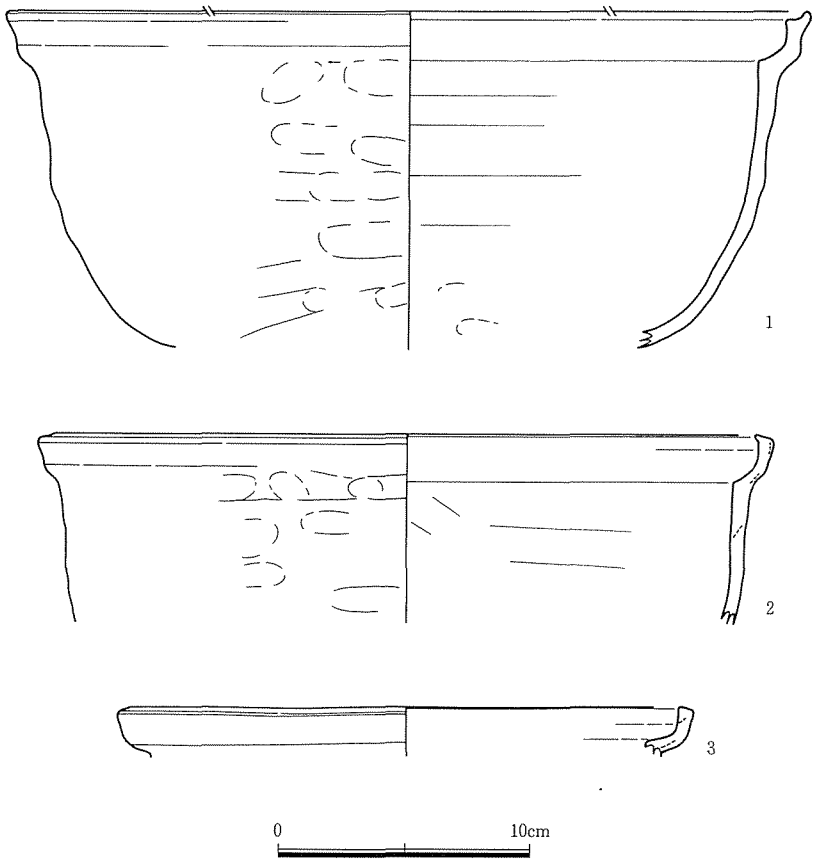
る。また後者は、径は30cm代のものが多く、深さは10～20cm代のものが多い。埋土は褐色シルトがほとんどで、暗灰（褐）色あるは黄褐色系のものがわずかに認められる。P-15の底部からは30cm強の根石状の石が検出されている。

これらのうち断面観察からは柱痕跡の可能性が考えられるものは６基程でいずれも建物や柵列等を構成するには至らなかった。しかしながら北東側には集中する傾向が認められることから、調査地外に広がる遺構存在の可能性も残る。

《おわりに》

各遺構の調査結果は上述のとおりであるが、以下、調査の所見にふれることでごく簡単ではあるがまとめの代わりとしたい。

今回の調査地は、標高12～13m、東の谷平野に面した丘陵裾に位置し、耕作の関係か上下２段の平坦部分を有する。この上下段からは調査面積が狭小とはいえ土坑３基、溝状遺構11条、ピット状遺構39基が検出された。これらの遺構にはＳＫ－03やＳＤ－06～08といった下段の一部にその主軸が他と微妙にずれるものが認められる。また調査地北東端部にピット状遺構が集中する傾向が認められる。いずれの遺構もその性格は現段階では明確ではないが、この変化、特徴の要因としては地形の制約や時期差ある



第８図　内海中寺ノ谷遺跡　調査地内出土遺物実測図

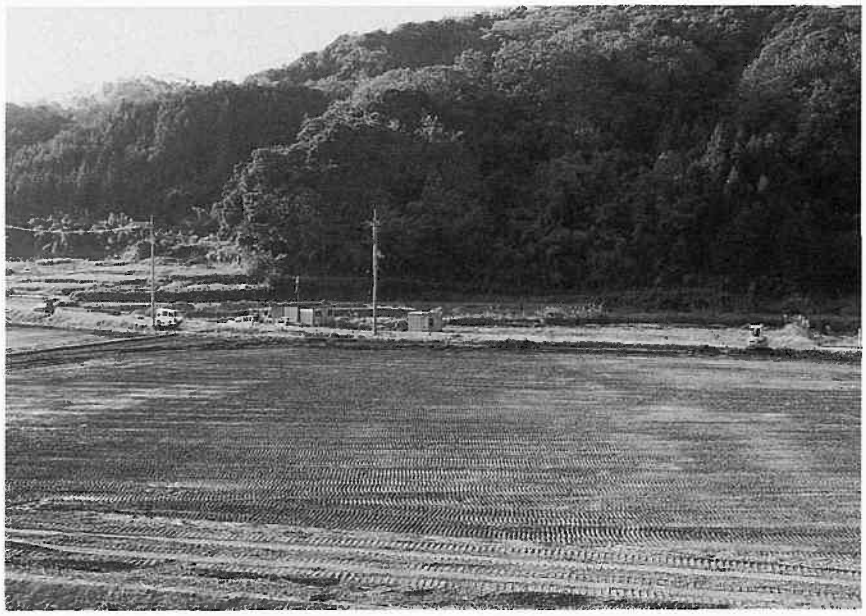
いは遺跡の広がり等が考えられる。

また遺物は量的には多くはないものの、受け口状口縁部をもつ土鍋（第８図、PL.4,5）等の瓦質土器をはじめ陶磁器類、土師器、須恵器が出土している。遺物の時期は土鍋や陶磁器類から中世（14世紀末～15世紀）と考えられるが、隣接地の調査では古代の２時期を盛期とする遺構・遺物が検出されたほか、中近世遺物や弥生土器も出土している。

これらのことから当遺跡は古代から中近世に数期の盛期をもつ集落遺跡で、調査地はその中心部とは言えないものの、北東側隣接地あるいは南西側丘陵裾上位付近に広がりをもつものと考えられる。なお調査地周辺の地籍図をみると小字には当遺跡名とした「寺ノ谷」や「万願寺」、「東寺井手」の名称が認められる。このことは周辺に廃寺跡等の遺跡存在の示唆ともとれるが、これまでの調査では明確にそれを示す遺構・遺物は見つかっておらず、今後の課題である。また内海川を挟んだ対岸丘陵付近には「城ノ谷」、「城ノ谷口」、「城ノ谷奥」の小字が認められる。先にもふれたとおり、丘陵先端に城跡を確認しており、図志にある「中村城」や「中村氏」との関係は現段階では明確ではないが注目していく必要があろう。さらに比較的狭い範囲ながらこの谷平野からは縄文時代から中近世までの遺構あるいは遺物が認められており、今後の開発等には十分配慮していく必要がある。

写　真　図　版

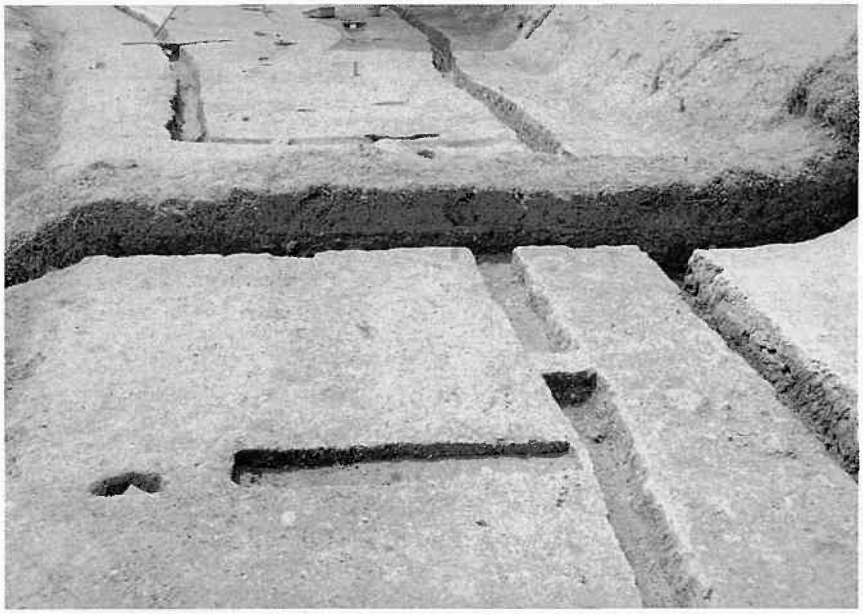
PL.1



1．内海中寺ノ谷遺跡
調査地遠景（東から）

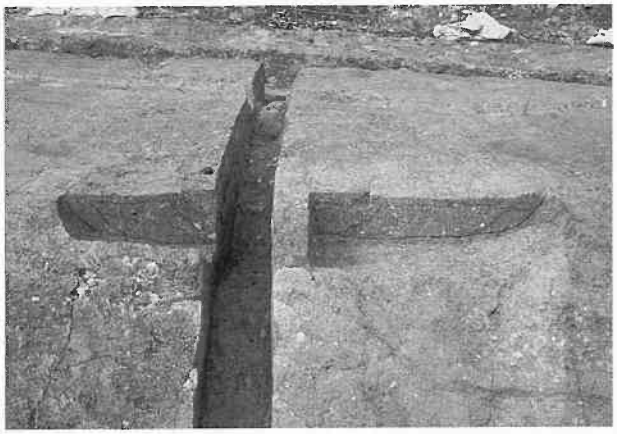
2．内海中寺ノ谷遺跡
調査前全景（南西から）

3．内海中寺ノ谷遺跡
調査後全景（南西から）



4．内海中寺ノ谷遺跡
中央横断ベルト断面（北東から）

1．内海中寺ノ谷遺跡　SK-01断面（南東から）



3．内海中寺ノ谷遺跡　SK-02断面（北東から）

2．内海中寺ノ谷遺跡　SK-01完掘状況（北東から）

4．内海中寺ノ谷遺跡　SK-02完掘状況（南西から）

5．内海中寺ノ谷遺跡　SK-03断面（北から）

6．内海中寺ノ谷遺跡　SD-04,03完掘状況（南西から）

7．内海中寺ノ谷遺跡　SD-02完掘状況（南西から）

1．内海中寺ノ谷遺跡　SD-05完掘状況（北東から）

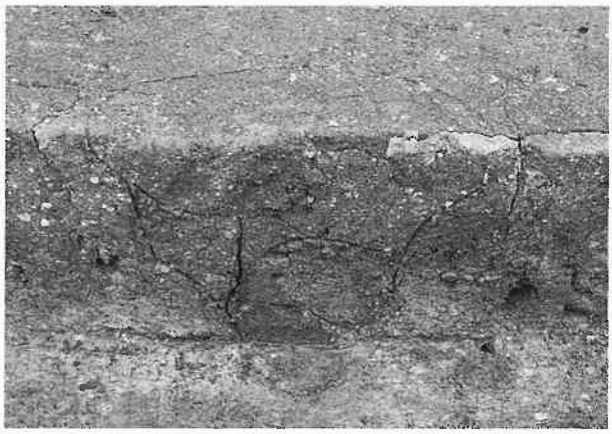
2．内海中寺ノ谷遺跡　SD-06,07,08完掘状況（北から）

3．内海中寺ノ谷遺跡　SD-11,09完掘状況（東から）

4．内海中寺ノ谷遺跡　ピット群完掘状況（北西から）

5．内海中寺ノ谷遺跡　P-01断面（南東から）

6．内海中寺ノ谷遺跡　P-02断面（南東から）

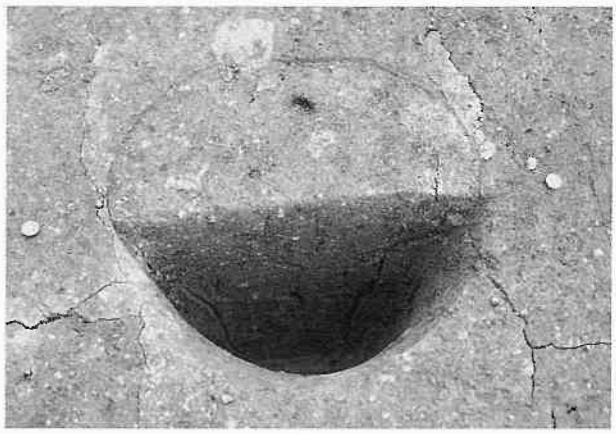


1．内海中寺ノ谷遺跡　P-04断面（南東から）

2．内海中寺ノ谷遺跡　P-11断面（北西から）

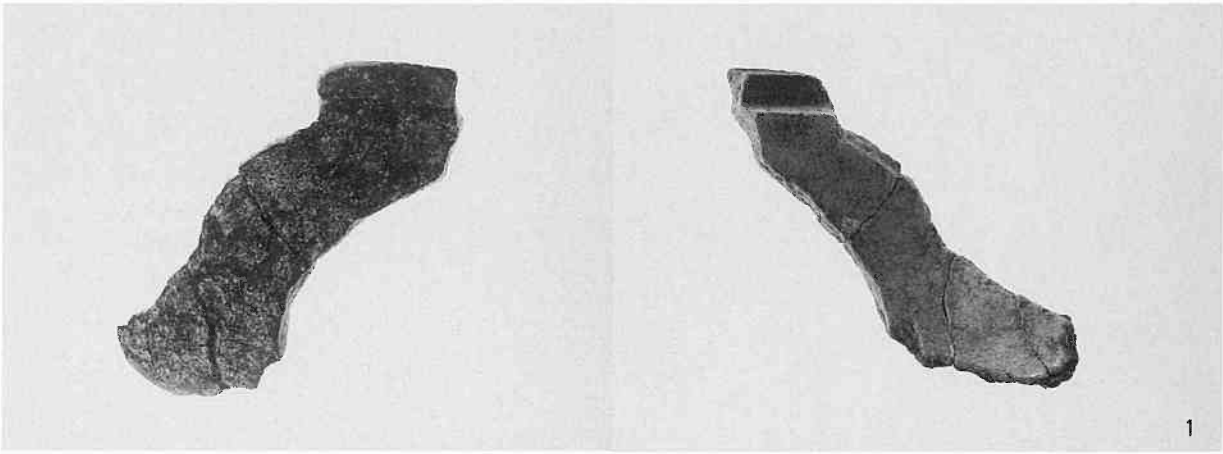
3．内海中寺ノ谷遺跡　P-14断面（南西から）

4．内海中寺ノ谷遺跡　P-15断面（北西から）

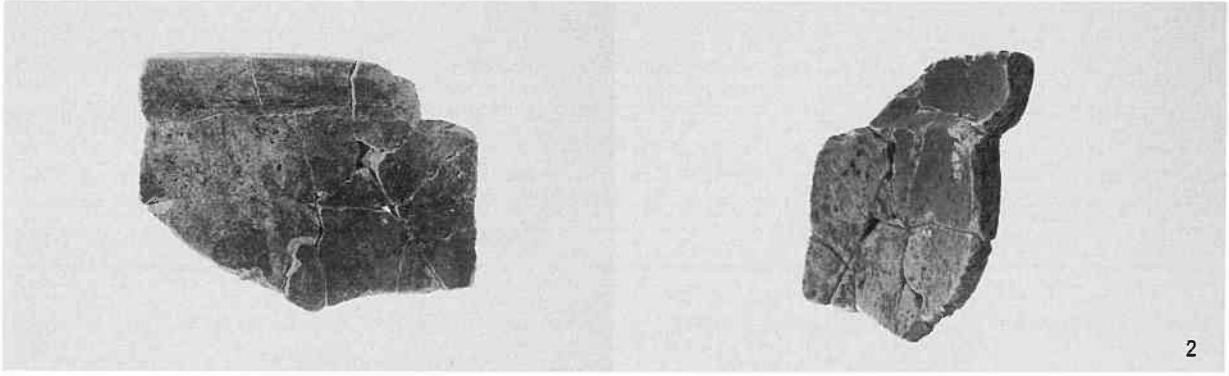


5．内海中寺ノ谷遺跡　P-27断面（北東から）

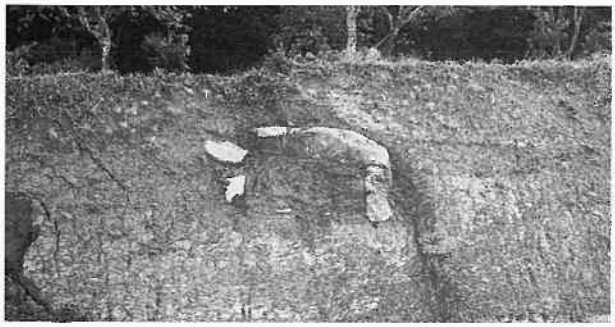
6．内海中寺ノ谷遺跡　P-29断面（北東から）



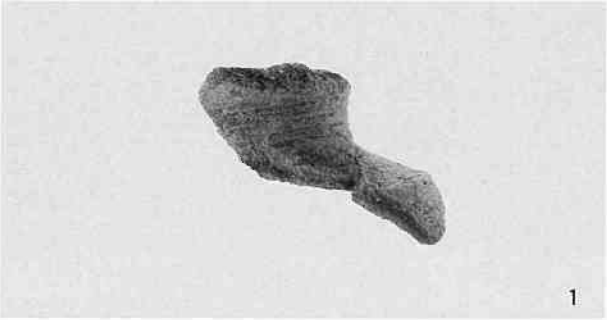
7．内海中寺ノ谷遺跡　P-28出土遺物



1．内海中寺ノ谷遺跡　遺構外出土遺物



2．内海中１号墳（仮）発見状況（西から）



3．内海中１号墳（仮）周辺出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うつみなかてらのたにいせき
書 名	内海中寺ノ谷遺跡
副 書 名	県営内海中地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（第２冊）
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	平川　誠　　山田真宏
編 集 機 関	鳥取市教育委員会
所 在 地	〒680-0047　鳥取県鳥取市上魚町39　　ＴＥＬ　(0857) 22－8111(代)
発 行 年 月 日	西暦　2005年 3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
うつみなかてらのたにいせき 内海中寺ノ谷遺跡	とっとりしうつみなか 鳥取市内海中	31201		35° 30′ 34″	134° 06′ 24″	20040802 ～ 20041018	207	ほ場整備

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
内海中寺ノ谷遺跡	集落跡	中世	土坑、溝、ピット状遺構	土鍋	

内海中寺ノ谷遺跡
県営内海中地区ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（第２冊）

平成17年３月　印刷・発行

編集・発行　鳥取市教育委員会

印　刷　所　株式会社　矢谷印刷所